

---

# 静かの海

天瀬漣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

静かの海

### 【コード】

N0684I

### 【作者名】

天瀬漣

### 【あらすじ】

静かな夜の少年とおつきさまの出会い。

月が、柔らかく微笑むような晩でした。

少年は、微かに囁く音を聞きました。それは本当に微かな音でしただけども、少年の深くはない眠りを呼び醒ますには充分過ぎる程でした。

「泣いているの、」

少年は悲しい夢を見ていましたから、始めは自分の小さな嗚咽で目を醒ましたのかと疑いました。けれど少年のまるくなだらかな頬は乾いていました。

「……だあれ？」

沈黙に紛れ込んだ音は、歌でした。か細く、けれど確かに響く、声でした。慟哭のそれではありませんでしたけれども、少年にはそれが泣いているのだと、しかと感ずることができたのでした。それほどまでに、その声は哀しい音色を辺りに響かせていたのです。

歌は、少年の誰何の声と共に聞き取れなくなってしまいました。それは、とても切ない声色でしたから、少年の胸に深く染み入って心の弦をひとつ、いつまでも震わせるようでありました。

少年は、半ばまで開け放たれている窓を見遣りました。少年は息を呑みました。そこには、昼を欺くような月夜の草原が広がっています。すべてが燦々と、その柔らかい金の光を浴び、大地などは、うつすら光さえ放っているかのようでした。

少年は溜め息をつきました。生まれてから一度だって、こんなに美しい月夜に巡り会えたことはない、と喜びに眼を細めました。

きらきらと、光の粉が降るようです。草原の草花も、森の木々も、それらを揺らす風さえも、月の光の儼かな静寂の前に、息を潜めているようでした。

「きれいだ、」

少年は窓から顔を覗かせて、誰もいない草原に言葉をおとしまし

た。

「ああ、貴方、人の子よ、どうかそう仰ってくださいますな、」  
するとどうしたことでしょう。鈴を震わせたように澄み切った響く声が、少年の鼓膜を震わせました。

少年は顔を上げました。声の主を確かめるために。けれど、相変わらず静かな草原に人の姿を見つけることはできません。少年は、その声の主が、先ほどの泣き声のその人であるとかたく信じておりました。

かなしい声の、あなたは誰？

胸の奥を、大きな手で締め付けられるようになるのは何故？

どうしてあなたは、そんなにも、かなしいの？

少年はついに窓から草原に降り立ち、裸足の足で草の感触を確かめました。

「どこに、いるのですか？」

沈黙。

少年は怯みました。

中空にぼっかりと浮かぶ月が、先ほどの美しさとは別の、威圧感のようなものを伴っているように感じられました。草原に独り立つ自分が、急にちっぽけなものに思われました。

それでも少年は、ともすれば幻聴だったのではないかと萎えそうになる意思を叱咤しました。

「どこに、いるのですか、」

望月の下で少年は再び問い掛けました。

「ああ、私の声を聴く者よ。私はここにいます。隠れもせずに。貴方は既に、私を良く知っている筈です」

そのとき、辺り一面を一陣の風が疾り抜けました。

少年は理解しました。そう、それが少年の良く知り尽くした、天に輝く月そのものであることを。

少年は、月によって乳白色に染まる群青の夜空を仰ぎました。

「ああ、あなただったのですか」

少年は瞳を輝かせて、いまだなめらかなその両の手を天に差し向けてました。

「なぜ、あんなに悲しそうに泣いていたのですか、」

「ああ、少年よ、きつと貴方はまだ知ることがないでしょう。けれど私は、悲しんでいるのです。確かに、紛う方なく、私の心は悲しいのです。」

少年には、きらきらと降る光の粒が、月の涙であるように感じられました。

「あなたは、そんなにうつくしいのに、何をそんなにも嘆いておられるのですか、」

少年は、なんだか悲しくなりました。天空で自分たちを照らす月や星にも、人間のようになり、嘆き悲しむようなことがあるのかと。

「ああ、美しいなどと。貴方は本当の私を御存じないからそのようなことを仰るのです。」

月は一層嘆きを深くしました。

「本当のあなたを、」

「ええ、そうです。本当の私を。私の姿を知っていますか。私など、所詮荒涼たる砂漠でしかないのですから」

近づいて、よく観察してください。

どれほど私が、乾いているのか。

どれほど私が、重い沈黙の前に言葉を殺しているのか。

「ああ、月には海がないのでしたね。ええ、知っていますよ、あなたの姿も。けれど、それがどうしたと言うのですか。ここから見るあなたは確かに美しく、人はあなたを讃えているのです。歌も、絵

も、詩も、あなたの光を讃えるのですよ」

「ああ、賢い子。貴方はいまだ熟さぬ身でありながら、良くものが見える子なのです。ならば、私のこの罪深さも知っているでしょう。地上の人々が口々に讃えるこの身の光は、けれど自らの耀きではないのです。遠く鮮烈に燃ゆる、太陽の恩恵をこらむっているだけなのです。私は、他人の光に与って我が物顔で夜空を横行するだけの、巨大な岩石の塊に過ぎないのに。」

月はそう捲くし立ててしまうと、再びきらきらと光を零しました。月と少年の間を、風が横切っていきました。

少年には、月の嘆きが理解できませんでした。月は自身を罪深いと称しましたが、少年にはとてもそうは思えなかったからです。

「御月様、僕にはあなたが悲しむ理由が、正直に言つて、よく分からないのです。あなたがお日様から光を受けていることも、あなたに海がないことも、もう人々は知っています。けれども、それがあなたのどんな罪になるでしょうか。その真実を知つてなお、僕達はあなたを讃え、敬い、畏れ、あなたに祈るのですよ。」

少年は跪きました。ずっと上向いていた首筋が少し痛みました。

少年は首が痛まない方法を考え、大地に横たわりました。仰向いて、真っ直ぐに月を見詰めたのです。

「ああ、貴方は本当に賢い子なのです」

月が嘆息しました。少年は、また少し、悲しく思いました。

「…皆が、そう言います。確かに、本は好きなのです。新しいことを知ること、とても楽しいことなのです。星や、風や、雲が、どんな風に巡っているのか、考えるだけで胸が躍るのです。」

少年は一旦言葉を切つて、眼を瞑りました。

「でも、僕は、賢いことが本当に良いことなのか、迷っている……」  
すると、優しい風がひとつ、少年の頬を撫でていきました。

「何故、迷うのですか」

少年は閉じた眼の奥で、様々な表情を思い出していました。学校の友人、先生、そして両親。みな、少年の身近にいる人々でした。

「みんな、僕に対してよそよそしいのです。僕は、そんなつもりはないのだけれど、和やかな雰囲気を壊してしまうみたいで。黙って笑っていれば良いだけなのに、些細な間違えを指摘してしまつては、みんな急に面白くなさそうな顔になることなんてしよっちゅうで、その度に僕は、……僕は、消えて無くなつてしまいたくなる……」

固く閉じた瞼の裏で、友人の冷めた目が少年を見ていました。ふつと、表情が消える瞬間。自分が、相手の気分を損ねたのだと分かる瞬間。ヒヤリと、冷たい手が少年の心臓を掴んで。

少年は眼を開きました。

月は、変わらぬ光で少年を包み込んでいます。少年は、なんだか泣きたくなりました。常に柔らかく感じ続けなければならぬ疎外感に、少年の心は疲れ切つていたのです。

「賢いことは、罪ではありませんよ」

月が静かに言いました。

そう、それ自体はきつと罪などではなくて。

では、この胸の痛みは？

責めるべきものなどないのに。

少年は、大きく眼を開いて、月に向かって手を差し伸ばしました。

そのこめかみには、一筋の雫。光の輪郭が滲み揺らぎます。

「御月様、あなたは、寂しいのですね」

ぼつりと、言葉が空に漂いました。

森が一斉に梢を揺らしました。

風が大きく旋回しながら、夜空目がけて昇っていきます。

「ああ、そう……。そうなのかも知れません。……そう、私は、寂しかったのですね……。」

風が、草原を揺らしています。この大地を揺らす腕。時には烈しく、時には穏やかに、この惑星を包む大気の流れ。

「御月様、僕らは……、この惑星とあなたは、こんなに近くありな

がら、とても、とても遠いのですね。この宇宙という果てしない空間で、これほど近く接していながら、僕らはこんなにも遠い……」少年は、涙を零していました。遙か悠久の時を重ねた月の孤独に、胸が痛みました。少年の僅かな孤独の年月でさえ、彼の心を痛ませるのです。もう、自分が寂しかったことすら忘れてしまうほどの星霜を、月は星の海原で過ごしてきたのでした。

「賢い子、ありがとう。そうでした。この胸の痛みは、寂しいという感情でありました。ええ、これは厄介なもので、なんでもないとにさえ、いちいち涙が零れるのです。そう、悲しみも、理不尽な憤りも、大方の嘆きはここから生まれていたのでね。ああ、貴方の賢さに罪が無いように、私の存在にもまた罪は無いのです。ただ、あまりにも寂しくて。あまりにも、本当の私を見てくれるものがない気がして。……途方も無い悲しみに、身をやつしていたのです。そう、当然の真理すら嘆いてしまうほど、……途方に暮れるような想いでした。」

少年は、両手をきつく握り締めました。涙は、あとからあとから零れて止みません。少年もまた、寂しかったのでありました。母親に、可愛くない子、と罵られたときの胸の痛み。父親に、顔を顰められるときの深い悲しみ。

「僕は、要らない子なのだと思っていました」

「ああ、可哀想に。本来ならば、賢いことは褒むべきことでありますのに。」

途方に暮れてしまうような、その寂しさ。

解消の糸口などみえず、徐々に心を絡めとる鈍痛。些細なできごと、積み重ねれば心を圧迫して。

「ものが見えすぎるのも、また辛い定めなのでありますよ。や。」

月の光が、降り積むように少年の頬を照らしています。涙の軌跡が、光に縁取られて微かに煌めいています。

「でも、御月様。誰も悪くなんてないのです。僕がちょっと、不器用なだけなんだ……」

だから、余計に悲しいのだと少年は呟きました。

「聡明な子、そう、人はみな不器用なのですよ。ここから、もう随分と長い間貴方たちの営みを眺めてきましたが、みな、不器用でありました。自身を護るために他人を傷つけ、また同時にそれを恐れ、生きるほどに傷ついてゆく。それでも、貴方たちは生き続ける。本当に、貴方達は不思議な生き物ですよ。ああ、小さな命、人の子よ、どうか傷つかないで。その大地も、貴方にとって果てしなく広い。貴方がここで零すその涙と同時に、遠い異国の地では、誰かが悲しい泣泣の声を響かせているのが、私には見て取れるのです。傷つかないで。今はとてもそうは思えないかも知れませんが、誰も彼も、其の地に生きる命は総て、独りなのですから。」

少年はもう泣いてはいませんでした。月の優しさに暖められて、その頬はほんのりと朱に染まり、水をたたえたような静かな瞳は、柔らかに微笑んでおりました。

「ありがとうございます。御月様。きっと大丈夫。あなたに逢えた、それだけで、もう僕の心は満たされました。」

少年は、本当に胸が一杯になって、言葉が上手く紡げなくなるほどでした。何か大きな感情が心を占めて、その欠片が、言葉にもならず零れ落ちてゆきました。

辺りには、柔らかな風が謡うように揺らめいています。月が微笑むような晩でした。

「私は、この孤独を誇りに思うことにいたします。いつまでも、天蓋を照らす孤高の光で在り続けることを。この孤独でもって、私はより一層冴え冴えと輝くことができるでしょう。」

月が、山並みに傾こうとしていました。

「さあ、もうお別れのときが来たようです。優しい貴方、私の幽かな声を、其の音の洪水の中から聴き分けてくれてありがとう。どうか、あなたの未来が祝福されたものでありますように。叡智の子よ、常に問い続けておありなさい。大地は、いつか必ず応えてくれる筈ですから。」

「さようなら！」

一斉に風が空へと舞い上がりました。木の葉も草も踊らされ、森はざわめきました。

さようなら

月の帰還に、辺りは音を取り戻しました。叢では虫の音が。微かに耳に届く狼の遠吠え。梢の囁き。風の歌。

世界はまったく、音で溢れていたのです。

少年は、深く大気を吸い込みました。少年の背の下で、大地の息吹を感じるようでありました。無音の、星の大海原に浮かぶわたしたちの大地。大気に護られながら、蒼く息づく命。

少年は、大きな夢を見ていました。

誰かに名を呼ばれたような気がして、少年は眼を開きました。その声は、少年の家から聞こえるようでありました。身を起こして辺りを見回すと、もうすっかりお日様が顔を覗かせています。

少年は、心の奥で、何か希望の欠片のようなものが瞬いているのを感じています。

少年は呼ぶ声に大きく返事をして駆け出しました。怒ったような顔をして、母親が窓から身を乗り出しています。もしかすると、泣きそうな顔だったかも知れません。

少年は両親からそれぞれ、夜中に寝台を抜け出た事を叱られましたが、それでもその表情は喜びに溢れていました。不思議に思った両親が訊ねると、少年は目を輝かせて応えました。

「とても、大きな夢を見たんだよ。小さな僕は、裸足で音のない海を旅してた。夢の浅瀬を歩いて、静かの海を渡るんだ」

両親は目を丸くしました。父親が大きく相好を崩して、詩人になれるなど言って少年の背を叩きました。

「ほんと、ほんとだよ、」

大きな夢を、見たのです。

さあ、今僕は疾り出し、窮理の原を駆けるだろう。

少年は、その裡に静かに広がる海があることを感じました。  
深遠な、海です。

心の底にどこまでも続く、千尋なる叡智を湛えた汀。静淵に透き  
通ってゆく。

一つとして雑音のない、沈黙。  
緩やかに波打つ心。

その、海の上には、ひとつ。

柔らかくそのおもてを照らすひかり。  
いつまでも欠けることのない、真円の月。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0684i/>

---

静かの海

2010年10月8日15時14分発行